

## エミリ・ブロンテ小論

真 田 時 蔵

近年エミリ・ブロンテの文学という迷宮を通り抜けることが、ブロンテ文学愛好家たちのあいだで知的流行になっている。<sup>(1)</sup>エミリほどその実像をみせようとしなない作家は少ないからであろう。世俗の風をできるだけ避けて、ホワースの牧師館でほとんど終生を過ごしたエミリは、ブロンテ姉妹のなかでも際立って内気で、自分の内面をみせることはほとんどなかった。<sup>(2)</sup>姉シャーロットがエミリについて述べた文章をみても、シャーロットも垣間見ることのできない世界をエミリは心の内に秘めていたことがうかがわれる。多分に気質的なものもあったであろうが、いっおう変わった家族のなかであって、なお風変わりなところのあったエミリの文学には、特異なものを感じられる。特にエミリの詩にそれを見ることができが、その詩稿にしても、もともと出版を意識したものでなかったことはよく知られている。<sup>(3)</sup>したがってエミリの詩作とは一つの独特の想像力から生まれた双生児であった *Wuthering Heights* (1847) は、<sup>(4)</sup>自分の作品が人目につかなくとも満足していただける作家の作品だったのである。エミリの最も感銘深い詩と同様、人間存在の意味を問い、人間性の本質についての洞察の深さにおいて *Wuthering Heights* はイギリスの小説のなかで特異な位置を占めているのである。

*Wuthering Heights* ほど多様な解釈が試みられた作品は少ない。出版されて以来この作品に加えられた批評の歴史をたどればそれがわかる。Ellis Bell という変名で性別を曖昧にしてエミリがこの作品を出版したとき、この作品に接した批評家たちのとまどいは当然であったといえよう。例えば、1848年1月8日の *The Examiner* の書評はつぎのようなものであった。

This is a strange book. It is not without evidences of considerable power: but, as a whole, it is wild, confused, disjointed and

improbable; and the people who make up the drama, which is tragic enough in its consequences, are savages ruder than those who lived before the days of Homer. . . .<sup>(6)</sup>

だが、1883年 A.C.Swinburne は *Wuthering Heights* を「本質的に、そして決定的に最も明確な意味において一編の詩である」<sup>(6)</sup>と評した。これはそれまでみられなかった評価である。*Wuthering Heights* はこのように出版後約半世紀を経てはじめて好意的評価をうけることになったのである。*Wuthering Heights* に対する評価がこのような経過をたどったのは、David Cecil も指摘しているように、われわれは芸術作品を判断する際、その作品と同じ傾向の作品を考え、そのジャンルの傑作を連想し、それに基づいた先入観にひきずられて判断基準を設定して作品を評価しがちだからである。<sup>(7)</sup>かの Leslie Stephen ですら「...Emily Brontë's feeble grasp of external facts makes her book a kind of baseless nightmare, which we read with wonder and with distressing curiosity, but with even more pain than pleasure or profit. . . .」<sup>(8)</sup>と評しているのである。このように *Wuthering Heights* は出版された当時は正当な評価をうけることなく、批評的風土になじむまで長い時を待たなければならなかった。

シャーロット・ブロンテは *Wuthering Heights* の1850年度版の序文のなかで、この作品についての世評を念頭におきながら、この作品を弁護している。この作品が'moorish'で'wild'であるのは、作者エミリ自身が育まれたのが荒野であったからだと述べている。これはこの作品が出版された当時ヨークシャーの風土を知らない人々に対する正当な解説であったといえよう。荒涼たるヨークシャーの丘陵と荒野とは、エミリの強靱な精神と想像力を育み、文学的靈感の源泉となっていた。エミリは荒野に息づく野生の生物と心を通わせ、憩うことができた。それは真の生の充実を体験できるところであった。エミリがシャーロットと共に3か月を過ごした Miss Wooler の私塾での生活のなかで、エミリがしだいに孤独感を深めていった様子をシャーロットはつぎのように伝えている。

私の妹エミリは荒野を愛していました。エミリにとってはヒースの真黒い色のなかに、ばらの花より鮮やかな花が咲いていたのです。色

あせた山腹の陰うつな盆地から、彼女の心はエデンの園をつくること  
ができたのです。彼女は荒涼たる孤独のなかに、多くの大切な楽しみ  
を見出しました—そして少なからず愛したもの、最も愛したものは—  
自由でした。自由はエミリの鼻孔の息でした。それなくしてはエミリ  
は死んでしまうのです。<sup>(9)</sup>

そしてエミリのそうした想いをつぎの詩にうかがうことができる。

It was not hope that wrecked at once  
The spirit's calm in storm,  
But a long life of solitude,  
Hopes quenched and rising thoughts subdued,  
A bleak November's calm.

What woke it then? A little child  
Strayed from its father's cottage door,  
And in the hour of moonlight wild  
Laid lonely on the desert moor.<sup>(10)</sup>

このようにエミリはたえず自然とのいわば靈的な交わりを通して、自  
己の生の充実を求めていた。それは先ず詩として歌われ、やがて *Wuthering  
Heights* という小説として表現された。*Wuthering Heights* は Arnold  
Kettle が指摘しているように、「すべての最高の芸術作品と同様、具体的  
であると同時に一般的、地方的ではあるが、また普遍的でもある」。<sup>(11)</sup>し  
かし出版された当時は異様な作品としてうけとめられたことはすでに述  
べたとおりである。その大きな理由の一つは、この作品に描かれた Heathcliff  
と Catherine の愛のすがたが、常軌を逸したものとしてうけとめられた  
ことは想像に難くない。読者には「因習的な宗教・道徳規準にはそぐわ  
ないものと感じられる」<sup>(12)</sup>作品でもあった。Heathcliff と Catherine の  
彼らを気づかう周囲の人々の同情はおろか理解も期待していないといっ  
た態度は異様であるが、エミリにとっては表現しないでいられなかった  
愛の情念の世界であった。そしてこの作品は、エミリの精神的自叙伝と

もいえるものであった。エミリは内気で社会性に乏しく、育ったホワース以外の土地での生活体験をほとんどもたなかった。そうした生活のなかで、荒野を吹き抜ける厳しい風、冬の寒さ、そしてそこにみいだした自由がエミリにとってなにもものにもかえがたいものだった。それはつぎのような詩句にもあらわれている。

I'm happiest when most away  
I can bear my soul from its home of clay  
On a windy night when the moon is bright  
And the eye can wander through worlds of light—

When I am not and none beside—  
Nor earth nor sea nor cloudless sky—  
But only spirit wandering wide  
Through infinite immensity.<sup>(13)</sup>

エミリの詩には彼女の精神の原風景が描かれている。それ故に彼女の精神を育んだ荒野のさまざまなイメージを用いることは、ごく自然なことであった。荒野の自然の荒々しさ、嵐の激しさ、冬の厳しさ、そしてそこにエミリが見だした自由が *Wuthering Heights* の Heathcliff と Catherine の愛のドラマを造形したといえるだろう。この小説に描かれている自然は、展開される物語の単なる背景ではない。それは自然そのもののもつ要素のドラマなのである。David Cecil がいうように「人生の個人的ならびに社会的側面は、エミリの世界には現われないのである」。<sup>(14)</sup>

それは *Wuthering Heights* でエミリが用いている比喩的表現にもみることができ。

“I wouldn't be you for a kingdom, then!” Catherine declared, emphatically—and she seemed to speak sincerely. “Nelly, help me to convince her of her madness. Tell her what Heathcliff is—an unreclaimed creature, without refinement, without cultivation; an arid wilderness of furze and whinstone. . . .”<sup>(15)</sup>

“Now, my bonny lad, you are mine! And we’ll see if one tree won’t grow crooked as another, with the same wind to twist it!”<sup>(16)</sup>

また、CatherineがEdgarとHeathcliffに対する愛情を比較しているつぎの言葉にもみることができる。

My great miseries in this world have been Heathcliff’s miseries, and I watched and felt each from the beginning; my great thought in living is himself. If all else remained, and he were annihilated, the Universe would turn to a mighty stranger. I should not seem a part of it. My love for Linton is like the foliage in the woods. Time will change it, I’m well aware, as winter changes the trees. My love for Heathcliff resembles the eternal rocks beneath – a source of little visible delight, but necessary.<sup>(17)</sup>

Heathcliffの名前自体が暗示しているように、エミリは自然の荒々しさを詩においてと同様 *Wuthering Heights* でも表現している。Heathcliffは自然のもつ破壊的力を体現した人物なのである。姉シャーロットと共にブラッセルのエジェ氏の経営する学校でエミリが学んでいた当時、すでに自然のもつ破壊的な要素について文章を書いている。

All creation is equally insane. There are those flies playing above the stream, swallows and fish diminishing their number each minute: these will become in their turn, the prey of some tyrant of air or water; and man for his amusement or for his needs will kill their murderers. Nature is an inexplicable puzzle, exists on a principle of destruction; every creature must be the relentless instrument of death to the others, or himself cease to live.<sup>(18)</sup>

エミリは自然界に存在するものが相互に破壊的關係にあるものとして存在すると考えていた。<sup>(19)</sup>これが彼女の作品の主調の一つになっているのである。人間は本来利己的な存在で、他の存在にとって好ましい良き存在であるよりも、悪しき存在としてあることをよぎなくされるとエミリは考えていた。David Cecil は *Wuthering Heights* に描かれているエミリの世界について、「あらし」の原理と「風」の原理によって説明している。<sup>(20)</sup>いうまでもなくこれは自然がもつ二つの原理である。*Wuthering Heights* のなかのアーンショー家とリントン家が自然のもつ二つの原理を象徴してコントラストをなしている。荒涼とした嵐が丘の荒野とスラッシュクロス屋敷を囲む谷あいの静かな土地とは対照的である。そしてまたそこに自然が示す秩序と調和の形成する原理がはたらいていることを David Cecil は指摘している。

Heathcliff の物語は平穏なアーンショー家に浮浪児 Heathcliff が異様な侵入者として加わるところから始まる。

We crowded round, and, over Miss Cathy's head, I had a peep at a dirty, ragged, black-haired child; big enough both to walk and talk—indeed, its face looked older than Catherine's—yet, when it was set on its feet, it only stared round, and repeated over and over again some gibberish that nobody could understand. I was frightened, and Mrs. Earnshaw was ready to fling it out of doors: she did fly up—asking how he could fashion to bring that gipsy brat into the house, when they had their own bairns to feed and fend for? What he meant to do with it, and whether he were mad?<sup>(21)</sup>

Heathcliff はアーンショー夫妻が相ついで亡くなったあと Hindley の虐待をうけ、Catherine が Edgar と結婚することを知って行方をくらましてしまう。約3年後に帰って来た Heathcliff は凄惨苛烈な復讐を始める。Cecil のいうところの「あらし」が始まるのである。そしてそれはエミリにとって自然のすがたそのものの表現なのである。<sup>(22)</sup>

エミリの生涯における個人的経験は何一つ *Wuthering Heights* に反映していないという指摘が時にはみられるが、彼女の恋愛体験についてはそのように考えられるだろう。しかしエミリの死についての意識は、幼い頃からエミリの体験に影をおとしていたように思われる。エミリがホワースの牧師館に接する墓地を眺めながら成長したことは、彼女にたえず死を意識させたはずである。

I see around me tombstones grey  
Stretching their shadows far away.  
Beneath the turf my footsteps tread  
Lie low and lone the silent dead;  
Beneath the turf, beneath the mould—  
Forever dark, forever cold,  
And my eyes cannot hold the tears  
That memory hoards from vanished years;  
For Time and Death and Mortal pain  
Give wounds that will not heal again.<sup>(23)</sup>

また、エミリが幼い時に母親を亡くし、相ついで二人の姉を亡くしたことは、一層エミリに死を意識させたことだろう。このことは *Wuthering Heights* に明確に反映している。Catherine は 8 歳で母親を亡くし、やがて父親を失う。Hindley の妻は Hindley も Hareton が未だ幼いうちに死ぬ。Linton Heathcliff は 13 歳にならない時に母親 Isabella を亡くす。Linton も 16 歳で死ぬ。Catherine は Edgar との結婚のあと娘 Catherine を残して死んだ時 19 歳になっていなかった。<sup>(24)</sup> 幼い時から相つぐ肉親の死を経験したエミリは、死の恐怖と不安を持ちつづけていたであろう。だが、エミリは死を避け得ない人生の現実をみつめるうちに、死の不安をのりこえようとする気持もまた強くなっていったと思われる。この想いはつぎの詩に力強く歌われている。

Though Earth and moon were gone  
And suns and universes ceased to be

And thou wert left alone  
Every Existence would exist in thee

There is not room for Death  
Nor atom that his might could render void  
Since thou art Being Breath  
And what thou art may never be destroyed.<sup>(25)</sup>

*Wuthering Heights* では、Earnshaw が眠るがごとく息を引きとる場面の描写と、Catherine が Heathcliff との激しい抱擁もうそのように静かに死を迎える場面の描写には、エミリの死の受容の姿勢を読みとることができる。

Her brow smooth, her lids closed, her lips wearing the expression of a smile. No angel in heaven could be more beautiful than she appeared; and I partook of the infinite calm in which she lay. My mind was never in a holier frame than while I gazed on that untroubled image of Divine rest.<sup>(26)</sup>

人間を死の不安を克服しなければならない存在として考えていたエミリは、永続する生への憧憬を強めていった。それは彼岸にある永遠との霊的合一を意味していた。それはつぎの詩にも読みとることができる。

I'm happiest when most away  
I can bear my soul from its home of clay  
On a windy night when the moon is bright  
And the eye can wander through worlds of light—

When I am not and none beside—  
Nor earth nor sea nor cloudless sky—  
But only spirit wandering wide  
Through infinite immensity.<sup>(27)</sup>



Barbara Prentis もエミリのこうした思想について'It has been claimed that for Emily, death was the true goal of life.'<sup>(28)</sup>と述べている。エミリの肉体を超えた不滅の生への憧憬は、*Wuthering Heights* で Catherine のつぎの言葉に最も簡潔に表現されている。

“... Well, never mind! That is not my Heathcliff. I shall love mine yet; and take him with me—he's in my soul. And,” added she, musingly, “the thing that irks me most is this shattered prison, after all. I'm tired, tired of being enclosed here. I'm wearying to escape into that glorious world, and to be always there; not seeing it dimly through tears, and yearning for it through the walls of an aching heart; but really with it, and in it. Nelly, you think you are better and more fortunate than I; in full health and strength. You are sorry for me—very soon that will be altered. I shall be sorry for you. I shall be incomparably beyond and above you all. . . .”<sup>(29)</sup>

肉体は魂を束縛する牢獄であり、魂はその肉体という牢獄を抜け出さなければ真の自由は成就しえないという思想が示されている。人間は肉体をもってこの世にあることをよぎなくされる。だが肉体は人間の真のありようを曖昧にする幻想を生みだす。この肉体が紡ぎだす幻想は人間の魂の自由を奪ってしまうとエミリは考えるのである。つまり、先に述べたように人間は本来利己的な存在である。この利己的な意識は肉体から生じるもので、それが歪んだ現実——幻想——で自らを蔽いかくしてしまう。そうした状況で人は愛を経験し、肉体を通してそれを確かめようとする。こうした愛のありようをエミリはまがいのものでしかないとエミリは *Wuthering Heights* で描こうとしたのである。この作品でエミリは、人間が自己の魂が求めるものを正しく認識し、幻想に欺かれることなく生きることの意味を模索している。

ここでエミリがこの作品を書いた頃のイギリスの女流作家達の作品をふりかえって見ると、18世紀以降女流作家達の小説は、結婚相手として然るべき男性をヒロインが分別をもて選択することをめぐって展開する。

Jane Austen の小説はその代表的なものといえよう。然るべき社会的地位にあり、然るべき教養を身につけた男性を選ぶことが小説のヒロインに求められ、作家達はそれをぬかりなく表現することが当然のことと考えられていた。*Wuthering Heights* はそのような夫選びの小説とは正反対の物語として展開する。*Wuthering Heights* という小説は、そのような当時広く読まれていた小説のパロディなのである。つまり Catherine と Heathcliff の激しい恋を描くことによって、エミリは Catherine と Edgar との結婚と、Isabella と Heathcliff の結婚をパロディ化しているのである。<sup>(30)</sup>

Catherine と Heathcliff が Hindley や Joseph からのがれて、荒野での遊び仲間としての関係にあった段階では、二人はまだ人として真に生きることを意識していない。二人は未だ混沌とした魂を共有していたにすぎない。二人はやがて社会的体験を経てはじめて、その混沌とした魂を共有していた段階から抜けだすのである。Catherine にとっての社会的体験は、彼女が Heathcliff と共にスラッシュクロス屋敷に足を踏み入れた時に始まる。二人がリントン家の者に発見され、庭から逃げだそうとして Catherine は犬にかまれる。それは体験の不可避性を暗示する象徴的意味をもつこととして解釈できよう。<sup>(31)</sup>この時の出来事を Heathcliff が Nelly に説明して、‘... if Catherine had wished to return, I intended shattering their great glass panes to million fragments, unless they let her out.’<sup>(32)</sup>といている。だが、結局 Catherine はスラッシュクロス屋敷に5週間とどまることになる。この時 Catherine はリントン家の生活にふれ、それまで意識することのなかった将来の生活を考えはじめる。つまり将来自分にとって好ましいと思われる生き方を考えるようになる。そして Catherine は Heathcliff と共有していた二人だけの世界を忘れがちになっていく。

“The crosses are for the evenings you have spent with the Lintons, the dots for those spent with me. Do you see? I’ve marked every day.”

“Yes—very foolish; as if I took notice!” replied Catherine in a peevish tone. “And where is the sense of that?”

“To show that I do take notice,” she demanded, growing more irritated. “What good do I get? What do you talk about? You might be dumb or a baby for anything you say to amuse me, or for anything you do, either!”

“You never told me before that I talked too little, or that you disliked my company, Cathy!” exclaimed Heathcliff in much agitation.

“It is no company at all, when people know nothing and say nothing,” she muttered.<sup>(33)</sup>

この時の Catherine を評して U. C. Knoepfelmacher は“The oneness of the child—rebels who defy the adult authority of Joseph and Hindley is about to be splintered. Their unity as an androgynous whole will be replaced by their individuation as sexually distinct adolescents.”<sup>(34)</sup>と述べているが、妥当な解釈といえよう。Heathcliff に対して「あなたと一緒にいて、あたしにいいことでもあるの」とまでいって Catherine は Edgar Lynton との交際を真剣に考えはじめる。それまで混沌とした意識でしか自分をみてこなかった Catherine は、将来の可能性をひめた世界を想い描くようになる。ひとたび心に思い描いた可能性の扉を押し開いたとき、それにとまなう不確実な期待は、幻想に彩られてしまう。こうした幻想をもつのは思春期にありがちのことである。Heathcliff に夢中になる Isabella の場合にはそれが一層明確に現れる。Catherine はやがて Edgar との結婚を正当化しようとする。

“Why do you love him, Miss Cathy?”

“Nonsense, I do—that’s sufficient.”

“By no means; you must say why.”

“Well, because he is handsome, and pleasant to be with.”

“Bad,” was my commentary.

“And because he is young and cheerful.”

“Bad, still.”

“And because he loves me.”

“Indifferent, coming there.”

“And he will be rich, and I shall like to be the greatest woman of the neighbourhood, and I shall be proud of having such a husband.”<sup>(35)</sup>

Catherine が結婚する相手として Edgar を選んだことは、先に述べたように当時の小説では分別のある選択であり、好ましい結婚話として展開しうるものであった。しかし、エミリは当時の社会因習では自明のこととされてきたこのような女性の生き方に疑問を投げかけているのである。つまり女性がこうした結婚をすることによって体面を維持しようとすることに偽善を感じとっていたのである。人は自分の真に欲していることを十分に自覚しているという幻想におちいりやすい。したがって幻想を幻想として認識しないままに行動することになる。そしてそのような幻想をもつことによって人は自らの未知の将来に対する不安を意識しないですむからである。<sup>(36)</sup> *Wuthering Heights* で Catherine と Isabella の結婚を描くことによって、エミリは人がおちいりやすい幻想がはらむ危険を表現しているのである。幻想によって人は自分のおかれている現実を見失い、自分にとってかけがえのないものとの正しい関係を保てなくなる。Edgar との結婚を考えはじめていたとき、Catherine はそうした状態にあったといえよう。人は自分にとって決定的な意味をもつ選択を迫られるとき、懐疑の淵に立たされることになる。そうした場合は社会的に認められた権威や価値観、あるいはそれに相当するものから完全には自由になりきれない。それで自己の自立性を犠牲にしても、自己の存在の安定を求めようとする。そうしたときに幻想が力のかすことになる。このような人生の実相をエミリは描こうとしたのである。人は結婚の対象として特定の人を意識するとき、社会通念によって是認されているさまじまの価値を意識せざるを得なくなる。結婚は本来社会的承認を求め形式でもあるからである。エミリは明らかにそうした結婚（社会的結合）と魂の合一（内的結合）とを *Wuthering Heights* で対比しているといえよう。<sup>(37)</sup> Catherine は上記の引用(35)でみることができるよう、Heathcliff との内的結合をすてて Edgar との結婚を望むようになる。Catherine は Nelly に対してその理由として ‘... if the wicked man in there had

not brought Heathcliff so low, I shouldn't have thought of it. It would degrade me to marry Heathcliff now; . . .<sup>(38)</sup>と話している。この点について Barbara Prentis はつぎのように説明している。

' . . . it is my own view that Emily Brontë was *primarily* concerned to delineate in dramatic form her philosophy concerning the corruption of purity and the conflict between good and evil to which she had given a first tentative expression in her essay, 'The Butterfly'. This is why, in *Wuthering Heights*, the crucial 'sin' is Cathy's, when she returns from the material comforts of Thrushcross Grange and for the first time sees Heathcliff as 'dirty'. This is the first and major turning-point in the book, a moment of false vision that can never, by either of the pair, be redeemed; it permanently distorts their lives.<sup>(39)</sup>

Catherine は Heathcliff との関係について正しい見通しを持っていないのである。結局 Catherine は Edgar と結婚し、同時に Heathcliff との魂の結びつきを維持しようという危険な離れ技を企てるのである。Catherine が Heathcliff への愛をすてきれないことは Edgar との結婚前にもわかっていたことで、Nelly に Heathcliff に対する想いをつぎのに告白している。

' . . . so he shall never know how I love him; and that, not because he's handsome, Nelly, but because he's more myself than I am. Whatever our souls are made of, his and mine are the same, and Linton's is as different as a moonbeam from lightning, or frost from fire.'

エミリは幻想につつまれた結婚と魂の合一とを明確に対比しているのである。人にとって真に安定した自己の存在を確保する道は、幻想を振りはらい幻想から自由になることである。エミリが思い描いていた真の愛とは、自由な存在が根源的に結ばれることであつた。「……わたしはつ

まらぬ世の道を軽べつする／わたしの心は自由 わたしの魂は自由」<sup>(41)</sup>と歌っているエミリであってみれば当然のことであった。ここに表現されている思想の延長線上に「わたしがヒースクリフを愛しているのは、ヒースクリフが美しいからでなく、ヒースクリフがわたくしよりも、もっとわたくしだからだわ。……わたくしはヒースクリフなの」という Catherine の言葉がある。ここにエミリの愛の思想が凝縮されているのであり、また、こうした表現にこそエミリがほかのヴィクトリア朝作家以上に人生の実相に迫る姿勢をみることができるのである。

Catherine が Edgar と結婚すると知って Heathcliff が出奔し、約3年後に Catherine はかつて Heathcliff と分けあっていた世界を再び取りもどそうとする。そして Edgar との結婚では魂を分有できる生活ではないことを痛切に意識せざるを得なくなる。やがて Catherine は死の床に伏し、Heathcliff と魂を分有していた子供時代へと退行しはじめる。

“Oh, dear! I thought I was at home,” she sighed. “I thought I was lying in my chamber at Wuthering Heights. Because I’m weak, my brain got confused, and I screamed unconsciously. Don’t say anything; but stay with me. I dread sleeping, my dreams appal me.”

“A sound sleep would do you good, ma’am,” I answered; “and I hope this suffering will prevent your trying starving again.”

“Oh, if I were but in my own bed in the old house!” she went on bitterly, wringing her hands. “And that wind sounding in the firs by the lattice. Do let me feel it—it comes straight down the moor—do let me have one breath!”

To pacify her, I held the casement ajar, a few seconds. A cold blast rushed through; I closed it, and returned to my post.

She lay still now, her face bathed in tears. Exhaustion of body had entirely subdued her spirit; our fiery Catherine was no better than a wailing child!<sup>(41)</sup>

Catherine はエミリがホワースを離れたとき常にそうであったように、

「荒野を吹きおろしてくる風」にもう一度ふれたいという。その荒野こそが Catherine と Heathcliff にとっての本然的世界である。<sup>(43)</sup>Catherine が求める風は肉体によびまされたいと感じている魂の象徴である。結婚によって Edgar と結ばれた Catherine の肉体は、魂をとじこめている牢獄なのである。それで Catherine は幻想によって欺かれていた肉体から魂が解脱することを切望することになる。Catherine は引用 (29) にあげたように「あたしはもう、すっかり駄目になったこの身体が、いやになったわ。こんなものに閉じこめられているのにあきあきしたの。あの輝かしい世界へ逃れて行って、いつまでもそこにいたい」と叫び、Heathcliff と二人だけの魂の世界を求める。肉体が減びても永遠に変わることのない死後の生への憧憬を、エミリは詩においてと同様 *Wuthering Heights* でも表現しているのである。エミリにとっては魂の合一こそが望ましい愛のすがたであって、肉体を通しての愛は永続性を約束するものでないことを明らかにしている。先に述べたように、Catherine や Isabella の結婚と、Catherine の Heathcliff との関係の対比は象徴的な意味をもっているといえるだろう。また、この二組の結婚からは子供が生まれるが、Catherine と Heathcliff の愛の結実を肉体を超えたものとしてエミリは描いているのである。幻想を紡ぎだす肉体を離れてはじめて成就される至福の境地への憧れをエミリはこうして描いているのである。なにものにもとらわれない自由な境地こそがエミリにとってなにものにもかえがたいものであった。そうした自由な境地にあって結ばれる魂の合一こそがエミリにとって真の愛のすがたであった。これはプラトンの世界といってもよいだろう。<sup>(44)</sup>一方、Heathcliff も彼自身の存在の拠り所である Catherine を Edgar に奪われ、“I cannot live without my life! I cannot live without my soul.”と叫ぶ。そして Heathcliff は復讐の執念に生きることになる。それは魂を失った Heathcliff にとって唯一残された存在のありようであった。愛は肯定的な自己の存在の確認であるのに対して、憎しみは否定的・反社会的な自己の存在の確認の方法にほかならない。自己の存在の確認行為は、人にとって不可欠の営みである。人に愛されることによる自己存在の確認が本来望ましいのであるが、そのような自己存在の確認の道を閉ざされた者にとっては別の方法によらざるを得なくなる。それは憎しみによる、時として反社会的で破壊的な自己確認と

なる。Heathcliff がリントン家とアーンショー家に対して復讐の鬼となって破壊的に振舞うのはそのためである。Heathcliff の復讐について U. C. Knoepfelmacher は, “His insatiable hunger for domination stems from his constant need to be compensated for what he has lost.”<sup>(46)</sup>と説明しているが, これは表面的な解釈といえよう。Heathcliff はやがて Hareton と Cathy のあいだに芽生えた愛に気づいて, 自己存在の確認が不毛なものでしかないと悟る。

“It is a poor conclusion, is it not,” he observed, having brooded a while on the scene he had just witnessed. “An absurd termination to my violent exertions? I get levers and mattocks to demolish the two houses, and train myself to be capable of working like Hercules, and when everything is ready, and in my power, I find the will to lift a slate off either roof has vanished! My old enemies have not beaten me; now would be the precise time to revenge myself on their representatives: I could do it; and none could hinder me. But where is the use? I don't care for striking, I can't take the trouble to raise my hand!”<sup>(47)</sup>

これは Heathcliff の復讐心が愛のやさしさにふれて氷解したのではなく, Heathcliff 自身にとっての自己の存在確認の様態が変化したということである。Catherine の死期が迫っていることを知って ‘Haunt me,’<sup>(48)</sup>と叫び, Catherine が死んで20年を経ても ‘Cathy, do come. Oh do — once more! Oh! my heart's darling, hear me *this time* — Catherine, at last!’<sup>(49)</sup>と Catherine に呼びかけ, 彼女が自分の前に現われることを切望していた Heathcliff は, Catherine と永遠の魂の世界で合一できることを確信しているかのように死んでいく。目に無上の喜びの表情をたたえて死んだ Heathcliff のうえに開けはなたれた窓から荒野の風が吹きこんでくる。それは Catherine の魂との合一を成就した Heathcliff の歓喜の表情である。‘Who is to separate us pray? . . . Not as long as I love, Ellen — for no mortal creature. Every Linton on the face of the earth might melt into nothing, before I could consent to forsake Heathcliff.’<sup>(50)</sup>という Catherine の言葉に應えるように Heathcliff の魂は肉体を



はなれて Catherine の魂と一つとなり荒野を共にさまようのである。人間としてこの世にあることは肉体を得て存在することであり、その肉体が魂を欺くというエミリの思想について先に述べたが、エミリのそうした矛盾をはらんだものとして人間が存在することの意味を作品に表現しえたのである。エミリにとって生きることは詩を書くことであり、詩を書くことを抜きにしての人生は考えられなかった。そしてそれはエミリが心の内奥にいただいていた霊的世界への憧憬をひそかに表現することであった。したがってエミリの詩は姉シャーロットと妹アンとの詩と異なって、彼女の魂そのものの叫びであった。そのことはシャーロットが姉妹たちの詩集を出版する計画をエミリに打ち明けたとき、自分の詩が人目にふれることをエミリが激しく嫌ったことからわかる。「月のさえた夜／魂をその肉体の仮の宿から／遠くつれ出し 眼を光の世界にさすらわせるとき／わたしはもっとも幸福だ」<sup>(51)</sup>と20才のとき歌った詩には、*Wuthering Heights* で読みとれる思想の萌芽がすでにみられる。エミリは孤独ではあったが、自分の世界を創造し、肉体をほとんど蔑視するかのごとく霊的世界への憧憬を強めていったことがわかる。それは彼女が *Wuthering Heights* を出版して約1年後に、死に臨んだときにも身をもって示したことであるように思われる。<sup>(52)</sup>ブレイクと同様、エミリは野に咲く花にも、一片の浮雲にも、野を渡る風にも「光の世界」を、永遠の霊的世界を見ていたのである。それはエミリが常に時代の外側に立ち、<sup>(53)</sup>時代の風潮に影響されることなく、人生の根源的な意味を模索しつづけたからである。そしてそこにわれわれは、エミリの永遠の生命を希求する祈りをみる思いがするのである。

## 〔注〕

(1)それは例えば次の D.V.Ghent の評価などをみればうなずけよう。

Emily Brontë's single novel is, of all English novels, the most treacherous for the analytical understanding to approach. It is treacherous not because of failure in its own formal controls on its meaning—for the book is highly wrought in form—but because it works as a level of experience that is unsympathetic to, or rather, simply irrelevant to the social and moral reason.—

- Emily Brontë's *Wuthering Heights*, ed. by Harold Bloom(Chelsea House, 1987),p.9.
- (2) Cf. Curren Bell, "Editor's Preface to the New Edition of *Wuthering Heights*" (1850).
- (3) Cf. Curren Bell, "Editor's Preface"
- (4) Muriel Mansfield, *Women Novelists from Fanny Burney to George Eliot*, p.147.
- (5) *Wuthering Heights: A Selection of Critical Essays*, ed. by Miriam Allot(The Macmillan Press, 1979), p. 40.
- (6) *Ibid.*, p.95.
- (7) Lord David Cecil, "Emily Brontë and *Wuthering Heights*," in *Early Victorian Novelists*(Constable & Co. Ltd, 1964), pp.147-8.
- (8) Miriam Allot, *op. cit.*, p.100.
- (9) Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë*, Chapter VIII.
- (10) *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*, ed. by C. W. Hatfield(Oxford University Press, 1963), p.32.
- (11) Arnold Kettle, *An Introduction to the English Novel*(Hutchinson & Co. Ltd, 1957), Vol. I, p.139.
- (12) W. A. Craik: *The Brontë Novels*(Methuen & Co. Ltd, 1971), p. 11.
- (13) *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*, p. 63.
- (14) Lord David Cecil, *op. cit.*, p.150.
- (15) Emily Brontë, *Wuthering Heights*(A Norton Critical Edition, 1985), p.89.
- (16) *Ibid.*, p.154.
- (17) *Ibid.*, p.74.
- (18) Emily Brontë, "The Butterfly," in *Five Essays Written in French*, trans. by Lorine White Nagel(University of Texas Press, 1948), p. 17.
- (19) Cf. 'For Emily Brontë, created beings can only be related to one another destructively. The strongest and most implacable beings live the longest, for the life of each depends on the death of others, and if it does not relentlessly kill it will be killed, or die

of inanition. The model of this relation is the consumption of one being by another. Nature is like a patternless maze created by a madman. Its insanity lies in the fact that the good of one part is the evil of another part. Therefore no coherent moral judgment can be made of any action or event. What is the worst evil for the flies, being eaten by the fish and swallows, is the highest good for the fish and swallows, since it is necessary to their life. Any attempt to make sense of life leads to inextricable confusion, and the creation can only be described, not understood. Viewed as a totality, nature is engaged in a constant act of suicide, tearing itself to pieces in the very effort to prolong its own life. Murder is the sole law of life, that is to say, life paradoxically depends upon death, and is impossible without it.'—J. Hillis Miller, *The Disappearance of God*(The Belknap Press of Harvard University Press, 1979), p.164.

- (20) Lord David Cecil, *op. cit.*, p.152.  
 (21) *Wuthering Heights*, pp. 38—9.  
 (22) Lord David Cecil, *op. cit.* p.154.  
 (23) *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*, p.166.  
 (24) Cf. C. P. Sanger, "The Structure of *Wuthering Heights*", *Wuthering Heights: An Anthology of Criticism* ed. by Alastair Everitt (Frank Class & Co. 1967) pp.205—6.  
 (25) *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*, pp.243—4.  
 (26) *Wuthering Heights*, p.137.  
 (27) *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*, p.63.  
 (28) Barbara Prentis, *The Brontë Sisters and George Eliot* (The Macmillan Press, 1988), p.157.  
 (29) *Wuthering Heights*, p.134.  
 (30) Cf. Tom Winnifrith, *The Brontës*(The Macmillan Press, 1977), p. 55.  
 (31) Cf. Dorothy Van Ghent, "Dark 'otherness' in *Wuthering Heights*," *Wuthering Heights: A Selection of Critical Essays* ed. by Miriam

Allott, pp.178-9.

(32) *Wuthering Heights*, p.46.

(33) *Ibid.* p.,64.

(34) U. C. Knoepfelmacher, *Wuthering Heights*(Cambridge University Press, 1989), p.82.

(35) *Wuthering Heights*, p.70.

(36) Erich Fromm の *Escape from Freedom* (1941) より多くの示唆を受けた。

(37) Cf. 'The contrast between Catherine's feelings for Heathcliff and her attitude to Linton, an attitude which we must also regard as genuine in its own sphere, as having a part to play in what may be called the symbolic structure of the novel, is highly important in this respect. The figure of Linton may be held, in a certain sense, to symbolize the superficial graces of civilised life, in which Heathcliff is totally lacking. It is perfectly natural that Catherine should feel herself attracted to Linton. Courtesy, charm and urbanity are all qualities worthy of admiration, and it is on account of them that she is, at a certain level of her nature, impelled to respond to Linton's affection; but, as she herself recognises, it is not the deepest part of her nature which is thus involved: 'My love for Linton like the foliage in the woods: time will change it, I'm well aware, as winter changes the trees. My love for Heathcliff resembles the eternal rocks beneath: a source of little visible delight, but *necessary*.' Once more the conflict between two types of feeling that are regarded as mutually exclusive is stated with a simplicity that is fundamentally intellectual in its sense of definition and emphasizes the absence behind it of all purely transitory or sentimental considerations. In the contrast between the *agreeable* and the *necessary*, between emotions which serve at best to adorn life and others whose absence is equivalent to spiritual death, we can observe once more the peculiar inspiration of the book, and our judgement of

it as a whole is likely to depend upon our reaction to these words.'—Derek Traversi, 'Wuthering Heights after Hundred Years,' *Wuthering Heights: A Selection of Critical Essays* ed. by Miriam Allott (Macmillan & Co. Ltd, 1979), p.164.

(38) *Wuthering Heights*, p.72.

(39) Barbara Prentis, *op. cit.*, pp.101—2.

(40) *Wuthering Heights*, p.72.

(41) Shade of mast'ry, I contemn

All the puny ways of men;

Free my heart, my spirit free;

Beckon, and I'll follow thee.—*The Complete Poems of Emily Jane Brontë*, p.55.

(42) *Wuthering Heights*, p.106.

(43) Cf. 'The Heights become a symbol of her lost and unattainable wholeness and happiness, now to be reached only through the grave : . . .'—W. A. Craik, *The Brontë Novels* (Methuen & Co. Ltd, 1971), p.20.

(44) Barbara Prentis, *op. cit.*, p.160.

(45) *Wuthering Heights*, p.139.

(46) U. C. Knoepfelmacher, *op. cit.*, p.71.

(47) *Wuthering Heights*, pp.254—5.

(48) *Ibid.*, p.139.

(49) *Ibid.*, p.33.

(50) *Ibid.*, p.73.

(51) *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*, p.63.

(52) Cf. Emily's death, as Charlotte has movingly described it, was a titanic battle of the will between Emily and Charlotte: Charlotte's fanatical determination to keep Emily alive pitted against Emily's equally strong will *not* to rally her forces to live, at least not as dictated by Charlotte. From her first moments of illness until she was actually dying she immunized herself against Charlotte's ministrations. First, she refused to have a doctor. In

Charlotte's words: "She refused medicine; she rejected medical advice; no reasoning or entreaty would induce her to see a doctor." Charlotte wrote to Ellen, October 28th, 1948:

Emily's cough and cold are very obstinate. I fear she has pain in the chest, and I sometimes catch a shortness in her breathing when she has moved at all quickly. She looks very, very thin and pale. Her reserved nature occasions me great uneasiness of mind. It is useless to question her; you get no answers. It is still more useless to recommend remedies. They are never adopted.'—Norma Crandall, *Emily Bronte: A Psychological Portrait*(Richard R. Smith Publisher, Inc.,1957), pp.133-2.

(53) Lord David Cecil, *op. cit.*, p. 148-9.

北星学園大学文学部 北星論集第29号開学30周年記念号 正誤表

| 頁・行目               | 誤                          | 正                                     |
|--------------------|----------------------------|---------------------------------------|
| CONTENTS<br>17行目   | Bronte                     | Brontë                                |
| 53頁<br>下から13～14行目  | 排泄 <u>3.9%</u>             | 排泄 <u>30.9%</u>                       |
| 59頁 18行目           | (寝た <u>き</u> 起きたり)         | (寝た <u>り</u> 起きたり)                    |
| 82頁 2. 病名          | 腰の病 <u>気</u>               | 目の病 <u>気</u>                          |
| 85頁<br>老人一人あたりの医療費 | 642,044 <u>人</u>           | 642,044 <u>円</u>                      |
| 85頁 //             | 900,176 <u>人</u>           | 900,176 <u>円</u>                      |
| 96頁 10行目           | (Table 1 の見出し) bland       | brand                                 |
| 194頁 20行目          | 'Haunt me, <u>u</u> ' (48) | 'Haunt me, <u>_'</u> (48)             |
| 200頁 10行目          | Emily Bronte               | Emily Brontë                          |
| 200頁 12行目          | p.148-9.                   | pp.148-9.                             |
| 270頁 5行目           | 才 <u>月</u>                 | 歳 <u>月</u>                            |
| 276頁 9行目           | 合意形成をつくり出 <u>す</u>         | 合意形成を可能にする                            |
| 294頁 17行目          | Rudor <u>f</u>             | Rudol <u>f</u>                        |
| 295頁 5行目           | 主要 <u>義</u> 題              | 主要 <u>議</u> 題                         |
| 301頁 14行目          | Chistengemeinschaft        | Christengemeinschaft                  |
| 304頁 2行目           | mench <u>ic</u> he         | mensch <u>l</u> iche                  |
| 316頁 16行目          | <u>V</u> iel               | <u>Z</u> iel                          |
| 318頁 21行目          | 比較者研究 <u>室</u>             | 比較教育研究 <u>室</u>                       |
| 321頁 下から4行目        | Fr <u>b</u> elforschung    | Fr <u>o</u> belforschung              |
| 322頁 3行目           | Bib <u>i</u> o             | Bib <u>l</u> io                       |
| 353頁 6行目           |                            | (1982) の後に追加<br>R.H.Tawney "Equality" |